

〔物語〕関東大震災からの復興と築地小劇場の興起―小山内薫、土方与志、山本安英、東山千栄子―

第八節 小山内薫の念願と演出（第一年十月『夜の宿』）

大正十三年十月築地小劇場第十三回公演には、ゴオリキイの戯曲『夜の宿』（『どん底』）が組まれた。これこそ小山内薫が古くから深い関心を抱き、演出に努力を重ねた作品である。帝政露西亞の下層社会を題材として、全三幕が貧民窟の木賃宿で展開される。

ゴオリキイ作・小山内薫訳『夜の宿』 第三幕

家屋の間に狭まりたる明き地。ぼろ屑散らばり、雑草生い茂る。後景に高き煉瓦の防火壁あり、天を覆う。その下に接骨木の叢。上手に角材を組み合せたる暗色の壁、庭に建てたる付属家屋、納屋が厩の一部なるべし。下手に木賃宿の灰色の壁、そこここに漆喰僅に残りいる。・・・下手の角材にナタアシアとナスチャ列びて坐す。上段の板には、巡礼ルカと男爵。上手の壁の側なる角材の上には、錠前屋クレシチ坐す。低き方の窓より帽子屋ブノフ覗きいる。

ナスチャ

（眼を閉じ、首にて話にタクトをとりつつ、唄うが如き調子にて物語る）それでその晩になるとその人が約束通り庭のあづまやへ来て下さる。あたしは、恐いのとかなしいので慄えながら

長い間待っていたのよ。そのひとも、体中がぶるぶる慄えていて、顔にはもう血の気がない。でも、手にはピストルを持っていたのだよ。

ナスチャ（ひまわりの種を噛みいる）まあ、なんだって、学生さんでもものは、みんな気違いだねえ。

ナスチャ　そして、恐ろしい声をして言うには、わが最愛なる恋人よ。

帽子屋　は、は。「最愛なる」と言ったかい。

男爵

静かにしろ。黙って嘘をつかせろよ。聞きたくなきゃ聞くに及ばねえんだ。それからどうした

ナスチャ

わが心の限り愛するものよ、わが黄金の宝よ、とその人が言うのだよ。僕の両親は僕が君と結婚することを許してくれない。そして、僕が君と手を切らなければ呪うと言っておどすのだ。だから僕は死ぬより外はない。こうその人は言うのだよ。その人のピストルは大変大きなので、玉が十も入っていたのだよ。さようなら、わが親愛なる心の友よ。僕の決心は曲げることができない。僕は君という者なしには、生きていられない、とその人はまた言うのだよ。そこで、あたしはこう返事をしたのだよ。忘れ難き友よ、ラウウリよ。

帽子屋

（驚きて）なんだと。クラウルじゃねえか。

男爵

（笑う）ナスチャ、間違ったぜ。こないだはガストンて言ったぞ。

ナスチャ

（飛び上る）お黙り、ごろつき、宿なし。一体お前達は恋というものがどんなものだから知ってるのかい。真実な、純潔な恋がどんなものか、あたしは、あたしはその純潔な恋を味わったのだよ。・・・

ナスタシヤ あんな人達にお構いでないよ。一体あの人達はなんだい。焼けるからだよ。なんにも自分に話すことがないからだよ。

ナスタシヤ (また座る) いや、もう話さない。みんながほんとうにしないで、笑うんなら。(突然詞を切り、二、三秒の間沈黙して、再び眼を閉じ、手にてまた話のタクトを取りつつ、声高に、口早に語り続ける。遠くに音楽聞こゆ) それから、あたしはこう返事をしたのだよ。わが生の喜びなる君よ。わが光り輝く星よ。あたし、とてもあなたが無くては生きていられません。あたしは気持ちがいのようにあなたを愛しています。この胸に心臓が鼓動を打っている限りは、いつまでも、いつまでも、愛しています。併し、あなたのお若い命を絶つことは、どうぞやめて下さい。なぜと言えば、なたの大事な御両親は、あなたを唯一の楽しみにしておいでなされるのです。御両親にとつては、あなたは無くてはならぬお方なのです。どうぞあたしを捨ててください。あたしはあなたを恋い焦れて、死んでしまった方が好いのです。あたしは寂しい。あたしは、独りぼっちです。どうかあたしを死なせてください。あたしが死んだって、なんでもありません。あたしはなんにも出来ないんですもの。あたしはなんにも取柄がないんですもの。ほんとに、なんにもないんですもの。(手にて顔を覆い、静かに泣く)

ナスタシヤ (ナスタシヤの側へ寄りて、静かに) 泣かなくても好いわ。

巡礼、笑いながらナスタシヤの頭を撫でる。

〔中略〕

ナスタシヤ あたしだって、いろんなことを考えてみるわ。考えてみて、待っているわ。

男爵 何をよ。

ナスタシヤ (困って笑う) それはねえ。まあ、こう思うのさ。あしたになるときと誰か来る。誰か知らない人が。でなければ、何かある。何か今まで無かったようなことがある。わたしは、もう随分永い間、それを待っているのよ。今でも、まだ待っているわ。でも、結局、それがはつきり見える段になると、当てにしていた程大きなものじゃないかも知れない。

やや長き間。

男爵 (笑いながら) 当てにすることの出来るものが、一つだけであるものかな。少くともおれは、なんにも当てにしちゃいねえ。おれにとっちゃ、みんな一度づつあったことだ。みんな過去よ。結局なあ、それがどうした。

ナスタシヤ あたしは、また時々こんなことを考えるの。あした、あたしは不意に死んでしまうんじゃないかしら。するともう、恐ろしくてたまらなくなってくるの。夏になると、よく人は死ぬことを考えるわねえ。そら、夕方が来る。いつ、雷様に落ちて来られるか分かりやしないわ。

男爵 おめえの生活も楽じゃねえな。姉がああいう悪魔だからな。

ナスタシヤ だあれも楽な生活をしている人はないわ。みんな苦しんでるわ。あたしの知ってるだけじゃ

マキシム・ゴオリキイ作・小山内薫訳『夜の宿』四幕

第十三回公演 十月十四日―二十四日 毎夕六時

木賃宿主人	東屋三郎	ワシリイサ	室町歌江
ナスタシヤ	山本安英	メドウデフ	生方賢一郎
ワシカ・ベベル	千田是也	クレシチ	河原崎長十郎
男爵	汐見洋	ルカ	丸山定夫
アリヨシカ	小杉義男	アンナ	若宮美子
ナスチャ	花柳はるみ	クワシニヤ	吉野光枝
ブブノフ	藤輪和正	サチン	青山杉作
役者	友田恭助	ソオフ	竹内良作

① マキシム・ゴオリキイ作・小山内薫訳『夜の宿』（『世界戯曲全集』近代社、一九二六年。六〇六―六〇八頁。）

マキシム・ゴオリキイ作・小山内薫訳『夜の宿』（『小山内薫全集』春陽堂、一九三二年。第四卷、二五八―二六一頁。）

韃靼人	洪海星	同宿人	伏見直江
演出	小山内薫	装置	溝口三郎
配光	岩村和雄	効果	和田清

①

ゴオリキイの戯曲『夜の宿』は日露戦争の以前、朝日新聞紙に『木賃宿』として連載され、これが最初の邦訳とされる。『木賃宿』を辿った森鷗外は、「黙阿弥の世話物を読むような心持ちがする」と語った。幕末における下層の男女と暗い世相を描いた共通性の指摘に小山内も共感する。自由劇場発足の前後には昇曙夢の訳で『夜落』とも『どん底』とも呼ばれたが、ドイツ語からの重訳を基本とする小山内訳では、ドイツ語訳に即し『夜の宿』と題された。②

築地小劇場における『夜の宿』演出は、有楽座での初演以来第五次にあたる公演であった。震災の前年に本郷座上演に際して小山内が述べる回顧には、翻訳や演出の労苦とともに歴代の配役も記録される。重要な女役には大抵女形が扮するなかで、有楽座でなされた第二次では帝劇女優香川玉枝が起用された。

小山内薫『夜の宿』の回顧（『小山内薫全集』第六卷）

① 水品春樹著『新劇去来―築地小劇場史（復元）その他』一二七頁。

② 小山内薫「ゴオリキイの『夜の宿』について」（『小山内薫全集』第六卷、五八一―六三頁）。

ゴオリキイの『夜の宿』を吾々が演出したのは、今度の本郷座が四度目である。―今度は二幕目を一幕見せただけであるが。

明治四三年に有楽座で二日間やったのが第一回。大正二年に帝國劇場で五日間やったのが第二回。大正四年に京都の南座で五日間やったのが第三回。これらはいずれも吾々の「小劇場」運動である「自由劇場」の名の下でやったので、普通の興行でやったのは、今度の本郷座が始めてである。……

木賃宿の主婦のワシリイサは、第一回から第三回までずっと秀調の持やくであった。それをこんど始めて松蔦にやらせて見たのである。ナタアシヤは一回毎に役者が変わっている。第一回が松蔦、第二回がその当時帝劇の女優であった香川玉枝、第三回の京都が莚三で、今度の第四回が芝鶴である。ワシリイサの伯父の巡查も一回毎に変わっている。第一回が鶴蔵、第二回が団右衛門、第三回が宗之助のところの故人になった門弟、今度の第四回が寿三郎である。今度出した二幕目には出ないが、この芝居で重大な役を勤めている人物の一つに、ナスチャと言う売春婦がいる。これは第一回に宗之助がやって、好評だった。第二回、第三回は表にもあるとおりの松蔦が勤めている。……

台本の事から言うと、私の翻訳が露西亞語からの直接訳でないことは言うまでもない。私が始めてこの脚本に接したのは、明治三九、八年頃―私がまだ大學を出たか出ない時分に―本郷の古本屋でアウグスト・シヨルツの独逸訳を見つけた時だった。第一回の時の翻訳は勿論これを土台にしたものだった。その時私の助手になって下訳をしてくれたのが、やはり大學を出たか出ないかの和辻哲郎だった。今では日本および東洋文化史の一權威である、あの和辻哲郎である。私は和辻君の下訳をほとんど全部書き換えなければならなかった。和辻君の訳が間違っていたのではない。私が舞台の上に演出しようとする詞のリズムやニュアンスが、

それに欠けていたからである。……

はじめてこの芝居をやった時は、往年の客気に駆られて、ただがむしゃらにやったというだけのことであった。……併し、第二回目の時は、私がモスクワの美術座（芸術座）で本物を見て帰ったあとのことであったから、少し誇張して言えば、面目一新で、なかなか第一回の時のような稽古の仕方ではなかった。①

『夜の宿』第一回公演を果たし、三十歳で中川登女子と結婚した小山内薫は、明治四五年十二月海外巡歴に出発した。モスクワでの滞在一カ月のうち、芸術座での観劇は十三回、とくに『どん底』は二回と『旅日記』に誌される。雪の大晦日芸術座でツルゲーネフの喜劇に接したあと、高名な演出家スタニスラフスキーの邸宅へ招かれ、同夫妻、チェホフ未亡人、名優モスクインと歓談した。② 貿易会社のモスクワ駐在員であった渡辺（東山）家に寄寓したのもこの旅である。

モスクワでの『どん底』（『小山内薫全集』第七巻）

大正元年十二月二九日私がモスコオへ着いた明るる日の明るる日である。通舟をつれてトレチャコフの画堂へいくついでに、美術座（芸術座）に寄って、いつのの好いから切符を売ってくれと言うと、もうこの

① 小山内薫「『夜の宿』の回顧」（『小山内薫全集』第六巻、三六三―三六九頁。）

② 小山内薫著『小山内薫―近代演劇を拓く』一三二―一三五頁。

一週間の一枚もない。八日先のならあるが、それはあしたからでなければ売らないと言う。・・・がっかりして劇場を出ようとすると、カッサの女が優しい声で後から何か判らない事を言う。通じに聞かせると、「今夜のなら一枚あるが、今夜のは要らないか、」と言うのである。「幾らのですか。」「六ルウブルのです。」「宜しい、買いましょう。」私は出し物も聞かず、場席も聞かずに夢中で切符を買ってしまった。・・・気が落ちつくど、私はその晩の出しものが知りたくなって来た。・・・

しばらくカッサの窓でくどくどと何か聞いていた通辞は、やがて私の側へ寄って来て、「ナ・ドニエエです。ゴオリキの有名なものです。私も一度見ました。ナ・ドニエエ。そうです。この底の方で、言う意味でしょう」私は通辞の片言を我慢して聞いている事が出来なかった。『ナ・ドニエエ』。この一語を聞いた瞬間に私の身体はぶるぶると震えた。思いもかけない喜びが、電気のように私を襲って来たのです。・・・幕があいて、先ず私が意外に感じたのは、色である。衣装の色彩である。赤がある、桃色がある、橙黄がある。「露西亜」と言えば何でも灰色のように思っていた私の先入観念はとっさに破られてしまった。私は実際幕の上があった瞬間には「恐ろしく綺麗だなあ」と思った。併しながら、その感じは一瞬間だった。舞台に漲る強い色彩は、戯曲の進むにつれて、この地下室の生活を一際陰鬱にしてみせた。私は「赤」といういろにどの位陰鬱な感じが籠っているものかそれをこの芝居で知る事が出来た。・・・

ナスチャの哀れに疲れた姿は最も私の心を引いた。京都の舞子に見るような、血の気の失せた、薄黄色い、蠟燭のような色をした顔。引き詰めにした貧しい髪の毛。体は終始疲れているようで、どこにでも寄り掛かる。何にでも肱を突く。ナスチャは極めて真面目である。センチメンタルな安小説に感動して、終始めそめそ泣いている。・・・

木賃宿の外の壁の一つに、屋根へ上げれる鉄の梯子が掛かっている。(第三)幕があくと、男爵はシャツ一枚股引一つで、この鉄の梯子の二、三段上に腰かけている。ナスチャは地下室の窓の側の石段に腰をかけている。ナスチャは大きな肩掛をしてその左に坐っている。巡礼は草鞋を繕いながら、その後には坐っている。帽子屋は窓の外の地面へ、赤だの青だの黄だの色々な布を継ぎはぎした蒲団を敷いて、それに肱を突きながら、そのおどけた顔を窓の中から出している。ナスチャは一所懸命になって、小説の話と自分の身の上をごっちゃにして話している。①

かつて青鳥歌劇団に所属した水品春樹は、築地小劇場落成の一カ月後演出部に入った。彼が執筆した詳細な公演記録では、演劇における『どん底』の古典的意義と、これに寄せた小山内薫の稀有な熱意も特筆される。同時代の製作ながら物語の内容と表現形式において、この作品が演劇の模範と仰がれるからである。

小山内薫の『どん底』(水品春樹著『小山内薫と築地小劇場』)

(第一年度)十月十五日から十日間、自由劇場以来小山内薫の十八番といわれる『夜の宿』(『どん底』)が上演された。この劇の久しぶりの公演のこととて、それは文字通り連日超満員の盛況であった。これには当時慶応劇研の学生たちが群衆として出演した。またそのころまだ左団次一座にいた河原崎長十郎が小山内に

前もって申し出て、毎日の稽古にも熱心に通って、クレシチ（錠前屋）の役で客演したが、「初舞台のように体が震えて仕方ありません」とよくいっていた。この公演は舞台上にも経営の面にも築地の最初の好記録であった。

わが国における『どん底』のそれまでに行われた主なる上演は、小山内薫によって行われたことは周知のことである。『どん底』といえれば小山内薫を思い、小山内薫といえれば『どん底』の舞台が眼に浮ぶ。それ程両者は深い歴史を持っている。若い頃の小山内薫はロマンチストであった。そして次第に年と共にリアリストとして成長していったのであるが、その反面にはいつもロマンチックな要素を多分に備えていた。『どん底』は作者ゴースキーのロマンチスト時代に書かれた作品である。だがそこには既にリアリストとしての後年の偉大な成長が約束されていた。この関係を知るとは、『どん底』と小山内薫を、そしてわが国の新劇を考える上に重要である。

小山内薫は何回かの『どん底』演出に際して、稽古場において登場人物に扮した俳優達と共に、「夜でも昼でも牢屋は暗い」のあの有名な歌―その歌詞の内容とメロディは、封建圧制下のわが国インテリゲンチヤの気持にびったりであった―をよく唄った。眼をつむり、あの特徴のある肩をふりふり声いっばいに。

『どん底』は小山内の新劇演出上におけるこの上もないテキストであった。かのモスクワ芸術座の製作態度である徹底写実主義の理論と、そこから生まれる表現様式をわがものとして彼は忠実に学んだ。彼に続く日本の新劇のかつての働き手や現在第一線に活躍している多くのベテラン達は、この彼にならった。そして生長した。作家も演出家も俳優も舞台美術を受け持つそれぞれの人達も！。

小山内を手本とする彼等の客観性と主観性はこの劇の創造の中に融けあった。舞台は上演ごとに調和した。劇を研究してその技術を磨き、また観客として鑑賞眼を高めるに、この劇ほど適当なものも他に尠ない。快音を奏で、満員の客がこれに酔った。かくして小山内薫演出になる『どん底』は、日本新劇の正しい原形として、その後の新劇を發展させた近代古典の一つとして今も尚多くの人々の心のなかに生きているのである。

劇を研究してその技術を磨き、また観客として鑑賞眼を高めるに、この劇ほど適当なものも他に尠ない。登場人物は皆われわれに身近な人達である。しかもそれがごとごとく生きている。型にはまった概念的な人物なんぞ一人もない。演出者や俳優達に先方から迫って来る感じだ。だからうっかりしていると、演出者や俳優達は彼等に足をさらわれる。私はしばしばそれを観た。まったく劇全体の構成が寸分の隙もない程カッチリ組み立てられている。装置、照明、効果の配置にも一点の非のうちどころもない。その上セリフの一句一句が実に見事に生きた言葉となっている。それはことごとく文学であると同時に演劇であり、演劇であると同時に文学である。

思えば、このセリフを巧みに表現して、舞台いっばいに活躍した「役者」の友田恭助、「ルカ」の丸山定夫、そして演出者の小山内薫、作者のマキシム・ゴースキーともに今やなし、噫！

稽古中演出者から、「人足」に扮する俳優が不思議に毎公演いつも一番よく駆られた。竹内良一も島田敬一も小宮譲二も。もちろん他の役の俳優も一人々々よく叱られた。みんな若かった。だからともすれば脚本中の人物に負けがちであり、演出に背のびした。小山内はそれをある時は優しく、或る時は強引に引っぱり上げた。開演中、舞台裏を築地帽の小山内はよく歩き廻った。舞台関係者のみんなは、それが巨人のようにもみえ、慈父のようにも感じられたものだ。

小山内薫と『どん底』、それは長き尽きない懐かしい郷愁である。当時の舞台の人達にとっても、客席にあ

ったひとたちにとっても！ ①

築地小劇場における『夜の宿』公演では男優として汐見洋、青山杉作、丸山定夫、千田是也など有力な専属の総出のなかで、歌舞伎畑から河原崎長十郎が参じている。猿若町三座のひとつ、河原崎座座主の長男である長十郎は、父親の歿後不遇のなかで、新劇での訓練へと歩を進めた。ドイツ留学中の土方与志に大地震の直後書簡を送り、震災の模様を報告しつつ、帰国して新劇再建に着手するよう促したのは彼である。後年同志として前衛的な〈前進座〉を結成する中村翫右衛門の自叙伝には、長十郎の経歴と新劇参加が記述される。

河原崎長十郎の新劇参加（『中村翫右衛門自伝』）

築地小劇場は経済的に欠損であったが、劇団員は熱情をもって演劇を創る活動に努力をつづけていた。この影響は当然歌舞伎の中へも入ってきた。その中心は河原崎長十郎君だった。長十郎君も江戸っ子で、新富町に生まれ、大正二年に十二歳で初舞台というから、明治三五年生れで私より一年おそい生まれだ。・ ・ ・長十郎君が十六歳の時、大正六年十一月九日に父の（河原崎）権之助氏は死んだ。・ ・ ・長十郎君は市村座のはからいで左団次一座に預けられたが、ほんとうは市村座の六代目菊五郎のもとへ預けられる話がきまっていたし、本人も希望していた。とすればどうなっていたろうか、左団次一座へはいったために、小山内

① 水品春樹著『小山内薫と築地小劇場』町田書店、一九五四年。一〇一―一〇三頁。

氏とも結ぶ。そのほか知名の文壇人と相識るようになって、長十郎君のもつ優れた才能に磨きがかけられていったことはたしかだった。小山内氏も六代目と結ぶ希望が強かったが、あまりにも封建的な周囲の事情で、かえって左団次氏と結ぶようになったとのことだった。

長十郎君は小学校では優秀な成績で、ずっと級長で通した。いま映画監督の滝沢英輔氏が同級で副級長であったそうだ。深く考える性質と、父を失って周囲の封建的なしきたりの中で育っていく独立生活は、彼のもっている科学的な性格に矛盾して、なにか新しいものをつかまねば、の意気に燃えていた。

小山内先生に師事し、よく家へ行って勉強していた。学生連中にも友人が多かった。土方与志氏もその友人の一人だった。小石川駕籠町の土方伯爵邸の地下室で、新劇の人たちと芝居をやったり、岩村和雄氏からグルクローズを習ったり、夜通し酒を飲み、新しい芸術とヨーロッパへの憧れに談論風発、青年たちと語り明かすのだった。

大正十三年の十月、築地小劇場でのゴリキーの『どん底』に、長十郎君が錠前屋のクレイシチの役で出演した。こうしてもっとも古い歌舞伎の伝統的な名門、河原崎家の一子は、最も新しい舞台に立って、感激のうちに新しい栄養を吸収していた。 ①

かく語る翫右衛門自身については、やがて歌舞伎の革新をめざす身でありながら、築地小劇場の創設にも新た

① 中村翫右衛門著『人生の半分―中村翫右衛門自伝』筑摩書房、一九五九年。下巻、一四一―一四二頁。

な学芸の興隆にも当時眼を閉じていた。「おどろくことには」と率直に彼は回顧する。「築地の芝居に全然無関心であったことだ。創立から一回も見えていないばかりでなく、小山内氏の葬儀のとき、はじめて築地小劇場の場所を知ったのだ。」「藤村・花袋・秋声などはちょっと眼を通して、わかりにくそうなので、手にとらなかつたし、一葉・二葉亭・独歩・鷗外すらも読まなかつた。私が築地へ近づかなかつた原因も、こういうところもひそんでいる。」^①

第十三回公演の翌月機関誌『築地小劇場』第一巻第七号には、観客の感想が多数収録されるが、うち『夜の宿』の関する三通について各々全文をここに転載する。

S K生「相当の感激をもって帰る」(「観客席」『築地小劇場』第一巻第七号)

築地で『夜の宿』を演る。これを聞いた僕達は直ちに小劇場に凡ての感謝を捧げずに居られなかつた。成功を予期したからである。また日本でこの劇を演ずる―現在の唯一の劇場たり得ることを信じたからである。そして相当の感激をもって帰る事が出来た。ただ、思いつくままを欠かして頂く事とする。

全体から言つて、俳優があまりに固くなりすぎた気がする。ルカ老人は別として。サチン(青山氏)はあいかわらずドッシリした声である。そして他の人物を統御しているがごとき観のあつたのは、むしろそ

① 『人生の半分―中村翫右衛門自伝』一〇五―一〇七頁。

の態度の高慢さよりも、声の抑圧がなした災いではなかつたらうか。

男爵には私は初めから非常な興味を持っていた。もと華やかに着飾れた男爵の、今は墮落し、遂にこの地下室の「どん底」に流れ込んだ境遇に。そして、その興味と夢とは、惨めにも踏みにじられてしまった。即ち男爵は夢をもたない。台詞の上に於てのみのほかには、彼の胸中に抱くべき何等の夢の表現がない。ルカ老人はただ一人その中によくこの劇を支えていた。真にこの「どん底」生活のなかに、トルストイ主義を持ち込む事が出来た。

ペペルとナターシャの恋は未だ弱い。暗い地下室の呻きのなかへ、所謂「真剣な恋」を投げ込むには、まだまだ不十分である。そのためにか第三幕の「路傍の夕」が、ポツンと独り立ちしている様にさえ思われた。またワシリイサの嫉妬と我欲を惹起する場面との均衡も如何であつた。

一体に破壊と争闘、反抗の気分が薄いように思われた。Konfliktがない。ただ人物の個々が思い思いの台詞を言っているのが、ある理想的な表調と局面とによって統一される事になかつたのは、これがためである。然しこれは、ルカ老人の宗教的な情調が、最後の幕に及ぼされたときに、払い除けられていた。

第二幕の幕開きにあの Desperate な歌が聞えて来た時は、ゾツとする程よかつた。第三幕のホリゾントの空の色が、幕の半ばから黄色から緑色になつたのは、変に思つた。「休の日」の時には夕べの空がよく現れていたのに、今度のときもああいう風にした方がよくはなかつたらうか。

関根幸一郎「人間の赤裸々の生活」(「観客席」『築地小劇場』第一卷第七号)

『どん底』は、誰れにでも常に周囲のなかに見出すことの出来る事でいて、あまり人々の前に作物として表れぬ、人間の赤裸々の生活を深い奥行でみせて呉れるものと云える。盗人、錠前屋、男爵、役者、帽子屋と、錠前屋の妻、娘、韃靼人という横の人々へ、木賃宿の主人、妻、妹の縦を織り込み、これに巡礼とサチンを斜めに交えて組まれている劇。

まず人物は、「われわれは良心を持たない」と人々に云うのは、自分自身の良心への言い訳にほかならない盗人ワシカ。私の考えではもう少し神経質でありたい。あれじゃ大盗賊か、兄貴分だ、もう少し小盗人でありたい。然し三幕目の演出に力が入ってよかった。「働いてこの生活から脱したい」錠前屋クレシチ、下積みの生活に陰気な影が、身の廻りにある心持で、特に自棄な言を吐く。このひとと、いつの間にか落ちぶれた男爵が、一寸同じ様であるのが、妙に気になった。何だか、男爵が落ちぶれて、錠前屋になった方が、本当の様な気持した。クレシチの第三幕での演出はなんだか、ゾツとしなかった。男爵の第四幕の独白は、かけ離れてしまった。

ブブノフ、これがいい。徹底している『どん底』の人だ。第一幕からずうっと破綻をみせぬ、一貫した人

① 『築地小劇場』第一卷第七号(一九二四年十二月)六一頁

を見せてくれた。然し、頭がよすぎやしないかなあ。花形役者から遂に自殺するに至る役者、随分弱い人だのに、少し強い所も見える。しかし時々見せる昔の回想は巧い、台詞もいい。主人、その人らしい演出、二階からの嘲罵がよかった。ルカとの台詞が全く頭に入っちゃった。反面にその性格がよく分らぬうらみはあるが、先ず無難と云えよう。

妻ワシレイサ、もう少し濃艶でありたい。と言っても、派手にしろ、とは云わぬ。バンバイヤ振りがまだたらぬ。物たらぬものとなった。ナタアシアもこの点で同じだ。徹底をかいている。つまりその人になっていない。ナスチャの方が未だよかった。生一本の様な所も面白いと思った。巡査、これは分からないこの作でもしも喜劇分子が含まれているとせば、この人だろう。見ている人々をして、ドン底につり込ませ、胸を圧する所まで導く時、助けてくれる役。

アンナ錠前屋の妻、休息と云う死よりも、苦しい現世に未練を残している人、随分悲惨な境遇だ。然しこの人長い間の病人に似ず、歩く時に力がありそうだ。身体でみせる破綻と云えよう。貧乏人の病人でなく金持の病人だ。

さてその次は批判者ルカとサチンだ。巡礼ルカ、印象は深く頭に残った。話の態度はよかった。何の幕でも、なにかみつめているような、哲人のような禅宗の坊さんのようなもので、昔あらゆる事をしつづいたようにもみえる。サチンはこの人から受けつぎだと云って第四幕に云う。「人間はよりよい人間を生むために生まれたのだ」と云う言を云いそうにみえた。サチン、飲んだくれだ。然し浮浪人とみせる演出には不成功だった。学者の、おちぶれ、と思わせた。態度がなによりそうだ。裏に作者グルキイがいる。

これで終わった。人々の演出には統一がよく取れていた事は嬉しかった。第二幕が殊によかった。面白く

ぐんぐん入れられた。一つ一つ燈火を消して行く、舞台効果は素晴らしかった。第一幕から、第二、第三、第四に用いるだけに、地下室の装置は気に入った。第三幕の路次は一寸受け取れぬ。・・・

総じてこの劇には「どん底」の悲惨さに作者の持つ楽天主義の含まれているのを、みのがせなかった。第二幕の幕開き前の合唱はよかった。姉妹の喧嘩は両方共に成功だと云えよう。

終りに望んで私は期待を裏切られなかった事を、総ての人々に感謝する。演技者に、演出指揮者に、そのほかこの劇を上場する事に助けられた人々に。

のぶゆき 「スケイルも大きく、本当の劇」(「観客席」『築地小劇場』第一巻第七号)

昨晚『夜の宿』を拝見致しました。以前脚本で読んだ時は、きつと無闇な混乱と喧騒におちていまいくらいが、闇の山くらしいな劇だろうと思いましたが、今度の演出は全く自分のその杞憂に反したことはやはりさすが老練な小山内氏の手腕でしょうか。

全体の気分にも少しも無理をした誇張や不自然のあとがなく、非常に自然でなだらかです。闇の叫喚、底力ある静かな暗い流れといった様な気がします。テムポもいつもの悪い急ぐ癖が全くなくなって、極めて落ち着いたものでした。それでいて少しのだれ場もないのは演出として大成功の点でしょう。全く知らずに時間が経って行きました。少しも退屈を与えませんでした。

勿論ある人は云うでしょう。この『夜の宿』には荒々しき、熱が欠けていて、低調に過ぎると。けれど安っぽい新派劇か何かのような、作られ誇張された生命のない荒々しさよりは、作られないならかな生命あ

る落着きの方を貴びます。全くあんなに群衆を使う劇でも、油でもしいてあるようなならかを、始終失わないのは不思議なくらいです。またゴヤゴヤわめいて騒ぐだけが、作者の主題とした気持でもありますまい。このことはシーストロームの映画の『靈魂不滅』などでも同様でした。

ただし今度の『夜の宿』は演出としては『瓦斯』よりはよくないと思います。というのは主要な俳優が役にはまりきらないからです。青山氏のサテインは全然その柄に非ず、まったく青山氏のごろつきなんて無理な注文です。それにさすが器用の汐見氏もあの男爵は持て扱ひ気味ですし、千田氏もようようと云う所、河原崎氏のクレシチも慣れぬためか固すぎますし、韃靼人も気持のよくない演出振ります。

けれど丸山氏のルカと友田氏の役者、それに東屋氏の亭主、室町氏の女房は光っていました。東屋氏は自分の貫禄、三幕目でワシカなどまるでおされ気味なくらいでした。丸山氏のルカは実に達者に、円満に上手です。まったく役にはまり切って、一人で全体をおさえていました。友田氏の役者は大好きです。本当に自然によく纏まった、見ていてひとりで会心の笑みの浮かぶような率直な芸です。今度の『夜の宿』の中で自分ルカは別としてこの人を一番好きです。

室町、山本氏をはじめ、女優の人達が日を重ねる毎によく来て来るのは、小劇場全体の為に非常に喜ばしい事です。今度も多少の不服はありますが、皆まず相当以上だと思います。藤輪氏のブブノワも三幕まで皮肉な上出来、悪いのか相変わらず皆を笑わせませぬ。

全体ではやはり第一幕が一番でした。肺病病みの女の悲惨、手風琴ひきのユーモアなどたまらなくよいものでした。舞台装置だって悪く云う人もあったも、あの狭い舞台をあれだけ活用した点は、大いに買って然るべき所じゃありませんか。第二幕目の幕開きはとても事、すさまじい程の陰惨味を漂せて、当に満点も

のです。あんな気分で一時間もおし通されたら、すっかりこっちで参ってしまうだろうと心配してしまっただけです。舞台裏の喧嘩はなかなかの御苦心だったでしょう。四幕目の大風一過の淋しい、わびしいだれ気分、そのまま腐って行くような気分も上出来です。

『夜の宿』はレーゼドラマでない、本場の劇にして味うべきものです。随分スケエルも大きくて色々考へさせられてしまいました。よい劇でした。友達と二人で充分に満足して帰れました。厚く御礼申し上げます。①

第十三回公演の『冬の宿』は広く好評を博し、足繁く諸劇団復活を確かめる秋田雨雀は、これを二度観劇した。

十月十九日は上演に先立って、著名な文学者多数による〈詩人の会〉が企画され、島崎藤村や佐藤惣之助の自作朗読が披露される。この催しについては機関誌『築地小劇場』に予告と成果が掲載された。

『夜の宿』観劇の十月（『秋田雨雀日記』）

十月十五日 六時から築地小劇場へ行く。『夜の宿』はすてきた。上手とはいえないが、パートがみんなよくはまっています。もつともつとよくなるらしい。舞台と光線はほとんど完全に近い。陰の音はすべていい。可愛い『夜の宿』という感じもするが、理解がだんだん近寄っているというふうに思われて来た。東

① 「観客席」『築地小劇場』第一巻第七号（一九二四年十二月）五七―六二頁

屋の主人、青山のサチン、友田の役者、汐見の男爵、丸山のルカ、洪の韃靼人はそれぞれにいい。青山、友田の二君、熱情を欠いている。室町、山本も悪くない。花柳君のナスチャは後の幕の方がいい。舞台の上の二部合唱は幼稚だが、あれはもつと練習する必要がある。いつまでもこの芝居を見ると、戯曲の堅実性という感じがする。私は現代までの最大の戯曲といったことがあった。不朽的なものだ。この劇場はこれだけでも記念するに足りる。

築地小劇場に詩を贈った。「廊下にたって」。パンフに出すのだそうだ。

十月十七日 晴。午後、お会式の曲馬団を見た。娘が男の手を離れて、高いところから落ちてきたので、思わず声を立てた。幸い下に網があったので助かった。ああいう娘達の生活を考えると、たまらない気がする。

十月十九日 朝十一時ころに家を出て、築地小劇場の詩人の会へ出席。島崎藤村、与謝野夫妻、野口米次郎、川路、白鳥、福田、富田、尾崎喜八、佐藤、竹久、中田、深尾の諸君と一緒に自作自誦の会に加わった。「高原挽歌」を朗読した。比較的よく朗読できた。島崎さんは「常盤木」のほか一篇朗読。静かない感じがした。萩野綾子の独唱があった。「星の世界」のマーシャがよかった。ライオンで夕食後『夜の宿』をまた見た。帰路、倉橋福子に逢った。髪を洗っていた。雨に降られながら帰った。

十月二五日 午後五時から帝劇へ行く。震災後最初の帝劇に入った。もとの内部よりもあっさりして却っていい感じを与えた。二階の食堂が広間になったのもいい。『神風』（平山、幸田）『西国心中』（林和）は時代逆行の作物だ。梅蘭芳はすてきた。支那文化の最後の名残。亜細亜大陸の旧文化の集積といっている。美しい線と死滅を語るような音楽。

十月二六日 築地小劇場にイタリーのピランデルロの『作者を探す六人の登場人物』を見た。錯覚を利用したもので、南方的な深刻味を持ったものだ。

十月二七日 夜、新国劇の『忠臣蔵』を見た。俳優の良心ということを考えさせられた。一体芸術家に良心というものを求められるものかしら。新しい日本の芸術家はいつか古い殻のなかへ入って行く。彼等にはほんとうの魂がないのではないか？

十一月二日 夜、築地小劇場にシュニッツレルの『恋愛三昧』を見た。ウィットと哀愁を与える三幕物。友田君は今度はいくらかはまり役のようなようだ。青山君の老音楽家も今までの出来だ。娘に対する感情は柔かだ淋しい。娘もいい。①

佐藤惣之助「詩の会のこと」(『築地小劇場』第一巻第五号)

機会がよかったか、この度の会はずぐ纏った。初め築地小劇場の小山内薫氏から申出があつて、それを僕がみんなに伝えた。両野口氏はすぐお承諾下さったし、川路、白鳥、福田氏もさんせいしてくれて、僕の希望は達しられた。殊に川路氏は詩の姉であり妹である音楽や舞踊について、新しい芸術団をつくりたい、と言っておられる際であるし、白秋氏の曲譜をつけておられる山田耕筰氏も、それを発表して下さい、と萩野あや子さんが研究的に藤村氏や川路氏のを唱われるというので、ひいては与謝野し、日夏氏、萩原

① 『秋田雨雀日記』第一巻、三六一—三六四頁。

氏にもお願いした。

事務万端は小劇場で主催してくれるし、土方氏の申出によると「詩人祭」として春秋二回にいろいろの催しをしてくれてもよいというので、その第一回の「詩人の日」の催しとして、この度は自作自誦の会をやることになった。これを機会に二回三回といろいろな事をやろう。若い人達にも出て貰う事にして、この度は日もないし、最初の試みとして女流の人にも出て貰い、今までの朗吟式なものから、ほんとうに新しい日本の語彙と発音、抑揚、音韻というようなものの研究をしてみる事にした。そして、それは俳優や音楽家の手をかりるのもよいが、やっぱり真の詩句の誦読や句切れや声音による詩の発表は、作者自らの内にある韻を感じている作者自身がよいという事になった。……

先ず火を点ぜよ。時代がそれをどう入れるかは、時代にきくよりないのである。少々お祭騒ぎかも知れないが、これは日本人として、日本語の詩人として、従来の漢語的なもの、また童謡民謡的なものから一步出る運動として、新しい詩の朗吟読改変の問題であるから、僕は喜んでその幕をあげてみよう。

藤村氏は指導して下さいと、与謝野氏、白秋氏にもお願いし、ひいては一党一派の首脳の人々にもお願いした。次にはもつと若い人々を入れよう。地方を代表する人も入れよう。雨情氏は早くから試みられている自作のものを歌って下さるし、福田氏はその試みの抒情悲劇というのをより戯曲的に発表すると云っている。何にしてもその日はたのしみである。別項プログラムとメンバーには少々狂いが生じようけれども、確かにこの試みはその主意を尽すであろう。詩の読み方、日本詩の語彙の韻と音義について考えておら

れる人々の参会を希望し、ふたつには日本の詩人の日として逐次いろいろの事をして行きたく思う。①

「〈詩人の会〉後記」〔『築地小劇場』第一卷第六号〕

十月十九日に行った〈詩人の会〉の詩人の自作自誦の催は日本に於ける新しい試みであったためか非常に好評であった。出演者は殆んど日本の詩壇の著名な方々にお集りを頂くことを得た。中でも藤村氏の自作自誦の如きはこれが最初で、恐らくは最後であろうと言われているのは日本文学史的にも意味深いことと思える。出演者は次のようであった。

島崎藤村氏	与謝野寛氏	与謝野晶子氏	野口米次郎氏	竹友藻風氏
野口雨情氏	秋田雨雀氏	川路柳風氏	佐藤惣之助氏	福田正夫氏
白鳥省吾氏	尾崎喜八氏	深尾須磨子氏	中田信子氏氏	富田碎花氏
(音楽)	山田耕筰氏	荻野綾子氏		

②

① 佐藤惣之助「詩の会のこと」〔『築地小劇場』第一卷第五号（一九二四年十月）五二―五三頁〕

②